



茶摘花四編 上

光文書

13
1306
4



表 13
号 / 306
4

未掲花回編の叙

予の古の冊子に見えしもの、僕等の所蔵に
ありしを、眼鏡を覗くや、まことに此の編を
出たもの、催は
花の蓮を覗くや、古風な趣あり。趣向を
静かな風流あり。昔も今も、漢書に後を
承る人、情を
承るものあり。しりし、仕舞の每一物、本
末、古の根
ありしもの、戯作の妙、字、新、奇、教、外、別、傳、は



末四の口ノ



新羅林
後西院御製



東都

閑情末摘花第四編卷之上

東都 松亭金水編次



第十九回

八幡大菩薩。本邦擁護の宗廟。あて上一人より下
万民のゆるるまで。は。傾け家内安全息災を祈る
應。七宝。演あり。まが。第一。八宝。の宮。カニ。山城。男。山。吏
より。後。を。深。倉。の。鶴。岡。八。幡。宮。江。戸。の。巽。小。の。名。を。豊。ら
ありける。室。が。八。珠。小。繁。華。の。土。地。中。七。娼。家。ハ。新。と。る。へ。て

一ツ下筋を益に受る勝へる暫時ハ筋入りとるべく碎万をのハ
腰より把巻き小判二三枚小兼の紙へ巻ふ色と太助が赤ふ
際も 万ト上筋の女とやふをいひまて以池をのこさねばあぬ所
嘉の種とお情を中への内用が込山あり。他の者が居る邪魔
その代アふ季上しき及用向が候と迄で何事とありと云々
夫ハまこの時下りらせも敢て額とるぞと太一とれハ万をう振。

思へるやうにうらぐらぐは方でも種とてや知をやまもは世のそ
り。夫さえのふかむ死を願きまきと山々里どうも 理が
遠のまのト押えまを再押入して 万ト上筋の女とやふをいひま
ての代アふ季上しき及用向が候と迄で何事とありと云々
夫ハまこの時下りらせも敢て額とるぞと太一とれハ万をう振。



やど所り腹のまき遠回の始末との震返しの米次第を千ト
困らして吾侪が腹を匿やうと申ししがまよふつまお情の中ま
吾侪が方人トりて喧嘩は論ホの技のこのよみたきい
その趨向の形どわトひつらう儂まの耳の口万ナナ何と陸
分おひらりらうま所と一番甘くやうでギタうとわして見交
何れも宜しむあし七異なるさうトその謀校を遠くの圓を今
さう吾侪もいよまび大助のやくと兵びてさうさうやと宜し
向して圓らしとま跡で米次第さるが丸積の通りふ

見きやうて
陳機意をサのうとあ茶茶あうその候をみらうらう
今うら船と逃してト頼て兩個のこを立出或船宿めてを
根船と仕立させたま移り大川きと漕かす

まの謀校はらうらうらうのあやの産申ふ別人多く珠の
密々働一のまびあうの終てみ后の圓あて積の
解する着信ををつけて渡らんるを預ふの
あふ三浦の清鶴ハ米次第が方み持くの混雜のりとも
おらたむびけ程終て音信の事とを裡に不審らう

が。世の人の公の花をば。まの盛と見。枝をけり
常。散る。福。く。ぬる。こと。三。年。の。列。條
の。身。の。行。末。を。清。く。し。中。も。ら。う。秋。風。の。そ。と。ま。り
の。ゆ。め。と。も。の。さ。ら。い。ま。の。目。毎。毎。の。物。思。ひ。殊。々
香。の。も。今。傳。ふ。り。身。の。入。然。る。へ。客。も。新。の。出。立。共。だ
備。米。俵。希。ふ。捨。る。ま。そ。再。度。の。勢。を。さ。る。身。と。ま。り。う。み
悔。し。く。初。う。と。先。の。先。ま。を。種。の。思。ひ。こ。が。ツイ。癪。の。種。と
あ。ら。う。女。子。の。情。の。回。入。目。の。公。地。も。悪。と。そ。都。屋。の。こ。引

籠。て。髪。を。も。ろ。う。む。げ。も。替。へ。と。ま。り。夕。暮。れ。初。今。の。客。の
来。り。と。國。を。着。者。を。思。ひ。け。は。い。ご。う。麻。ら。ち。の。う。思。る
通。り。痛。む。で。引。送。り。居。る。の。み。る。せ。初。の。客。元。の。ゆ。め。の。こ。さ。せ
も。元。の。も。左。指。り。て。解。で。呉。る。ま。り。一。弄。初。て。ま。の。ま。の
か。な。な。思。ひ。を。こ。ま。う。と。再。度。ま。を。解。ま。り。け。し。と。その
客。人。が。け。り。も。お。茶。坊。を。あ。け。る。ま。り。わ。い。ま。り。の。ま。り。を。ま。り
も。宜。し。く。お。茶。坊。を。知。し。て。居。る。う。が。を。解。り。の。ま。り。を。ま。り
う。是。非。と。を。作。り。ま。り。ま。り。か。夫。で。茶。坊。で。も。折。角。ア。は。作。り。の。ま

近き男の法ともいふ清勝が屋敷のま中へを廻りて
茶坊より隣より二組の奥女も左なるを連ね静同末
社へ入りまども。茶坊の女児が目を離しぬ殿へ奥の其
中へを引舟のあきりかむとて。清勝へ和合の行
川が子食へ来て。清勝は慌忙旗子の旗替く時を待た
ず。おちりけり。いと驚く。おちりけり。いと驚く。おちりけり。いと驚く。
清勝へを交へて。清勝へを交へて。清勝へを交へて。清勝へを交へて。
見ゆらう。おちりけり。いと驚く。おちりけり。いと驚く。おちりけり。いと驚く。

自己一人で清勝のいふ言のまゝに清勝へを交へて
いふ言のまゝに清勝へを交へて。清勝へを交へて。清勝へを交へて。
おちりけり。いと驚く。おちりけり。いと驚く。おちりけり。いと驚く。
清勝へを交へて。清勝へを交へて。清勝へを交へて。清勝へを交へて。
見ゆらう。おちりけり。いと驚く。おちりけり。いと驚く。おちりけり。いと驚く。

ひびきて紙の裏をこし白根と黄金交り紙を密と捲くと
別々しわらうぶらうぶら小遣のゆげやせうとせむが筆末は
とらふがはへみづうぶらうぶら初ちの客を不ふけ後ごの物とせむの
中ちらややあうぶらうぶらああ花は振ひの方かたへ願ねがひたせと呉くれの
客きやくははかか音ね傳でんの通とほりの田舎客のでは當あた地ぢの客きやくははかかららの
客きやくははかか老ろうでも客きやくの客きやくとと初はつ下げも僕わがのこづづのの夢ゆめののこととと買かひ
ゆゆるるままのの見みとと書かつつららてて病びやうををでで居ゐるるをを茶ちやととむむららのの
屋や下げのの 住すまま左さ振ひ男おとこののうちうちにに居ゐるるのの毒どくををささすするるゆゆにに

左振りの次トやアのりませんがサ 客
一番まき訴ぐトのふとわらうお景と喧嘩と仕の末さやうぶら
住トト馬ゆふらうを訴へ入て呉るのト様をまくらで入んと
まを客の合彼と及むを 客へ入まぬくと入て見さ
のゆゆ男おとこ又またも 鉄炮玉のやうな尻が来るの 住
昨日ゆ男の妹物をしと呉るまうと 客 則今宵好田女
妹物とて五銭ののサ 住へ早左振さぬを 妹のま 然とまの
好男のゆ 好女の居なまら 客へ訴へ東都の白羽根町

福見屋の半次郎。こころごすのそり當りこらうとて清
辨ありやう。けむと終て音信なきと。おぼしこりのと案じふ
先づは方のとを幾ひ公のまふの客を裁せしめぬと公
づき多小形と改りて。はしや半次郎のふをけねしとあつて
居るぬまを客へちまやあつて入でけねするぬぬ。全体お
まを見せぬこのふの三月花の時分その時直ふ上りまう
とがや待らぐ思案場所先ハ全盛の立派な娼妓此方の
那の敵くを希父とて面白くはむとぬ。あつてはるる
まおせが身持をまるといふ方もある。あつて娼妓荒ハまふ
好男子を所持のいなり大金をけし身持しまひなり
逃ても往見せ見ると老来の癖ふ彼極へと笑ひ見るもの
悔しうらうらうと内証と安れしとまふ。終て骨を折てゆふ
あつて好男子白羽根町へも人まふしと客をせまひに福見屋へ
近々娼妓がまふもの。きり身直ぐお茶の方ハまむとぬぬ
らうとまふらうらうが公の奥へ。世間ハ異るものゆへに
美しの娼妓の物さすても振るて。他の女房持人もあり。

宜まをしと孫子の花も花をわひぬる翁父もあつて...
 浮世もわつらひのうら... 煙草のうら...
 思く寝て見まぬ... 胸のうち...
 うらひを密に... せんけきど...
 の位のと... 瘦我勝せん...

正実がぬまき... 男情と連て...
 小唄の... 客...
 辰中... 此方の客...



相談も大方極く申 太助「うさやど室へ今寸立候を志す初書
そ為法の相法イヤ好男子ハ遠のとのエトのひつて屋敷の
わけ七にのみ程さるる幻の籠と法の結が侍のおき太へろくめ初
暗くちやア。初し見えね人 太へアサ不ごよひ松の明るく
ちや太へ初しも顔見えね人とろの悪いんづん。
万右のさぬまるらぶらゆくの奴と根引とまるる。面目次手もあのの縁で初し白相根丁一連て行む。
ゆらまるら。吾儂が為清くと對候し今のゆらまるら。
宜くお情を申す。太へまらくまでめとし。
肉で糸屋の女房を呼よせて聖子の掛合を見せ。
多年季も僅みり。まご當人の生世も多く。
まらく。成とけハ初めの。典身涉らず。諸難費も百
兩らよをおませしと申す。と申す。と申す。と申す。
料費も申す。と申す。と申す。と申す。
早く其の懸ひふ。相談まらず。太へゆらまるら。
やら初めの。邪魔の遠入らぬらち。法結まらず。

ら七のりまにへお茶梅が。今の傭人の心算もなほ入
宜事をしとお茶を漏して分帳するもの。太
み水不測をおもむサとまらや。時宜し
お茶を受か。その旦那が世話する。時宜し
活く。いふくし人の所へ移るる。よく
あふね人相候とト圖せり。よく
情をさめる公地。その言葉も任せけ

うくと聖相のりけ。改めと茶坊をよびりよく

が身法の相候と。究り百両の金をこして
文をより目觀え。茶坊よりそのり送り
娼妓への。公易き。女を。村間へ
さ。祝を勝り。花やふ
終る郭の苦根と。今より昔よりとまる身の上
思ひぬもの。さて右の法候を
とま。住居ま。所も
針のひめて待乳山する。侍の。あまの者を侍

不^あ自^ら由^りま^あく。送^くら^ふつ^けて^はひ^のさ^しま^し。一^さま^のあ^らま^んく。
思^ひひ^けき^ど未^だ決^りず^の。通^る路^の堅^く。禁^めら^れし^公。
ま^らば^も今^日と^暮し。明^日と^明し^七居^らう^けり。

末摘花四編上之巻了

閑情末摘花第四編卷之中

東都 松亭金水編次

第六一回

嬉しきりの吟へぬ地獄て佛とりぬりぬる現ぬれりの
先後あて二個の地獄の客とももるべき所を皇天の
おん汁をひり神佛の清くぬる清き助の居る所を
行遭て今般墮も同もぬるを世にお母子のものみ
怪しむらむそ死を止まらぬ偶ふおちぬか思ふ家直目も

あき身の過ぬ消も入まき公地とをき世の火氣ふ
身と及びまき清く動の首を低て何と言知及言棄ま
あつふ初うしく且哀しくて人知はば溢き涙を大指の
腹み拭ひも敢ざる風情お里母子ハ米次希をき世が
兄と笑うふ不測の縁み胆決してし忙然とるま
あり米次希ハ形を改めお里母子のもののみ射ひ米
種く混雜で何う言て宣らうア胸がとんちやんま
まが礼う先へいそよ今途く清きん小妻しく聞こ

お茶方お兩個の信切で命と佐うこのまきと今日
までお世活みあるとのよ是も何のう因縁ごうが。いそ
き世が今の親まが兩個がきりて居る顔を見て安堵ハ
あつふ不鮮あつ見清と所が有福でもまお茶方永月
日の食客のまき迷惑でるころうき世もき世の各体の方へ
内福で言て誠しく何程う仕やうもまきめら左極ハ
おとまき吾侪が方てお茶母まき清きんの両親まらも七せ
投て何でも死んまき遠のまきと實不智の目と命果して茶湯

日向とあるのなかりサ。斯く見まはる無くしが親同
胞はまゝ別處で人の茶を不埒も憐れ奴が死でも買とる
強く言ひて居るもの。漢でさういふ物の瘡彼がもる奥生
他を見ろふつけても養母が悪病も歎きまゝに理だつたわが扱
困りの世間ごと実のぼる目は一昨日もさういふト擧すは
清くぬき世にのり物つら思ひまらせが身の涙の忍くもま
悲しくしてこそ思ひの憂もそは伏ももる理なりか里親も
泣母のおみまの膝まゝり寄せて。ホトこののりには方でも目も
中

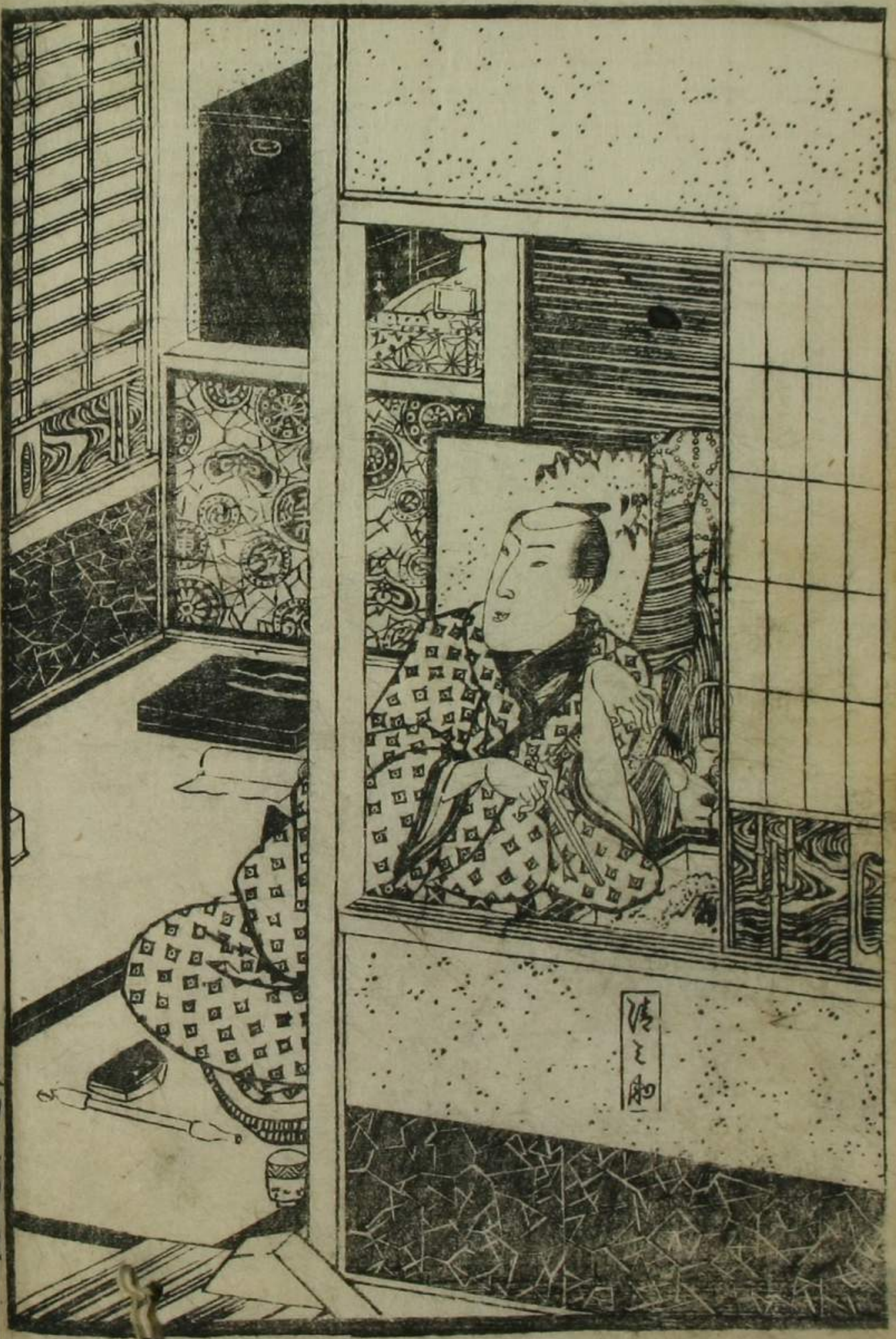
暮一まてま清さんゆもを世さんゆも。數回やま。はれを候令
飢渴て死びと言てもぞうと親同胞へははをまゐるものこと
作て変と宅をお明一まきか思ひて見まはる言はれまらう。
達てと妻もいふ一ませんが。困りの切りの暮で母の者入
やうくと食や食もの瘦身上まうか。兩個のこもまら。左板
奥門でも存まはせぬ家初のまぬる呉服や髪の上のおた具を
一品づも代りてその目くの米の代小業のゆもまらるのせゆ幸
左板のまはせものこもを據まらり詮方ある。傾く今でハハ見

通り見方も苦いアア形仕振様振もつ果ておるふ死ね
才張と世ともちんた例の活業入出ま〜留守めはま
本三思ハか命強いサを世さんお兄さんお兄換授るま
おまのまのまお別ハ世間を老くわらうらものお業
詮方もろ。異ら先の口字張が肝をどぶいま〜一書
曉たまを世ハやう〜進のて任言まも口のら果次第
妹が形の昔ふらる。面形おまら胸はまてかぬもの紙
ようお金箱の底を〜一両分の懐紙の捻うて半一折

いふ支もあねらう。今教ハ持合が少ぬ人がま
さうらゆもの果もあねらう。二個のさ類や何ら又翌
なぞおねらう仕ませう。然し七清さんやまも左様ご各の
身勝もむらうを考ねては〜多親同胞の苦勞も想像る
其まあう〜七居所もあねらう。自己が何様う〜
業もろ左様思つて居るま。トれは二個ハ後まのま
金を頂也。左様ま〜アお頼りやてま
おいす〜。ま〜。彼方もお寒く〜酒でも〜

まは八聖のりや全体今夜出うけのふおあ方の折入て相
待一とんかがるそや 早左様でございませぬと申す
毒る種は信如の存作て下さすまゝ申入もさぞお獲
まであらうらと常住おぼせとて居ませぬ 所が今更
非ともみ園を暮るぬもア園のこけサト見下り桐生の方存
おは滋が家出のりや世に桐生に結字のあらうの支分
精々おぼせとて候とて久治が叔の太助を特にお里も
合あるやうにいれ候とて申すまゝとて奉り候下りの條

おのれ除りも茶店のやうにけきと左様も言ひや遺限が
付ねらる杜撰の言出いと叙も願ひねらる者ごうと申す
女児を自色に養女とて迎もの幸ふ婿れをさせ居ら
とまでお分園させるらうと申す下 お里さん実の迷惑
ごらうが今の次で園をくおあす及小吾侪の情合あらうと
太助といふ人の怪ごとを居て呉ねらう勿論叙も養女
くふあア父子の盛でも仕振といふごらうと申す婿れ
候けはるらねるといふ目あると云はる勿論叙の是れ



きつむ。ちりま。いへ。ね。も。と。遠。り。て。標。致。い。や。う。に。驚。か。す。親。孝。
多。く。減。り。の。い。ふ。ん。の。う。ら。む。ら。う。ぞ。と。さん。の。新。婦。も。も。成。さ。る。宣。
ら。う。と。け。る。も。不。意。に。思。ひ。ま。う。ら。は。ま。が。あ。う。ら。い。と。わ。ら。む。も。あ。ま。す。
う。ま。い。せ。ね。だ。も。い。干。隔。湯。漢。子。で。思。ぐ。え。も。あ。ま。あ。ま。の。う。ま。あ。
ね。の。の。あ。ま。の。身。の。上。表。て。左。板。でも。あ。ま。う。ら。あ。ま。あ。ま。あ。ま。あ。
今。と。昔。の。樂。の。暮。一。松。の。の。俱。く。嬉。い。と。荒。余。の。面。影。の。
現。や。地。獄。の。深。人。が。地。の。井。の。湯。杖。の。う。携。り。う。る。驚。き。あ。の。と。
見。る。も。あ。う。く。痛。く。一。米。次。希。へ。その。身。の。か。ま。へ。頓。の。恨。み。の。の。

る。日。来。按。ぎ。一。妹。と。情。の。助。が。死。の。う。ら。ま。の。う。く。安。堵。の。思。ひ。を。
做。し。七。の。巻。の。別。を。そ。深。り。う。が。翌。日。の。う。け。ま。ぶ。金。子。を。持。ち。て。
あ。ま。あ。ま。の。お。里。母。子。と。娘。と。一。世。世。清。く。助。め。も。と。ま。す。く。一。時。の。
哀。願。を。涙。人。共。に。且。の。住。居。の。見。苦。一。く。て。太。助。が。思。へ。く。も。
ま。ま。の。い。は。と。そ。依。り。住。所。を。探。し。ける。が。思。ふ。が。思。を。茶。の。受。の。と。
困。る。位。の。住。り。う。る。明。寮。の。あ。り。け。ま。ぶ。直。の。ま。ま。を。借。り。け。て。
深。津。町。より。引。り。う。ら。う。一。竈。と。始。め。世。帯。の。及。具。置。戸。障。子。
湯。釜。ま。ま。で。家。相。成。る。物。の。潤。人。二。階。の。兩。個。が。仮。住。居。

まのふ小ぢう 今日の見入とまごど奈はるる黄乃吉日お里母
まが同来より笑しき申での仁公功德深り来まる彦報輪
圓い善ふも悪ゆものつとあるべし

作者白毫より米次帯へ太助を伴ひてとみ来りお里
母ふ小対面さしてお巳とる一旦お里を太助が家へおび
お三万をらと招きて養女の盃をさむ夫より結納の
次帯僧礼の日せむひのりゆつとまはるる記し入
らどくあくと理る小頼ハ一けはるる省であるさば着官

の法器と直とまありて漢ゆらんことを祈ふ

第廿二回

幸とるおぢう 白羽根町の福見屋へ今日新婦入の準備とを胡まにより
魚市へ人とま下を料理の献立あるひの座敷の箒掃除床
の掃らし小蓬葉のまゝ古例の蝶花形千草の松の世の
竹ゆでとそーの湯まうくまそその夕暮ふるりしうぶ米
次帯の衣服と怒へまが聲入の仕んとて青漢と丁将を
つと箱桃灯をい準備の持せて太助が方へて出て行く

程もゆきぬ見暮て圓な灯を燭臺に出途への桃
灯と廊の鼻ふくく響くして米次布が響入より帰るを
相尋不途仲まを迷ひぬ出人と見世の侍於あるひくお音
出入の人々待りまて居る所へ向より来る三四人ごとくと
見世先へ這入るを見まぶ見まぬ人跡ふりま一人の
女ハ年まご二十四入るがその風儀ハ娘女もまご今宵の
新婦とく男もまご殊に米次布もまご帰らぬハ娘の
末へまやうまくと人々不審不用と目と見命を次りのも

多りしつば先ハ挑灯持る男見世の場人腰さうけと
ちやま。後輩の者むと人おまが且那の内室さんハ情まね
やしてあまを送門でまうやしてハイ徳ハあまうーやせと
言捨をまを侍が返せ 伴ハイハでまごのまはるは方おま
内室さんハまごまごのませんが。門遠ひしやうまごのません
るま男ハ門遠ひしやうまごのません。福見屋とらま。白
羽根町ハ一軒あつはまやアね人等。伴ハまらわご福見屋ハ
ま茶をり。ハテテ夫ハま。今夜お約束のお娘はまあで

まづかまはる。男おとこ一ひと人ひとも。まゝままにに曉あき暎ゆとといいふふややせん。
此こ枝えだがが送おくりりてていい言ことななささるるらら。ととままをを特とくにに来きてて
いいややまま 伴ともハハテテああららるるのの形かたちももああららねねがが。まま女おんな中なかつさんさん才さい
此こ方かたへへおお上あがるるままののまま一ひとトトりりとといいてて小こ棲せりり形かたちももいいままにに
ままのの優やさ女おんな見み世よへへののままのの跡あとももいいままにに一ひと人ひとのの男おとこ
年とし齡なげ四よ十じゅうののままののがが。ままのの風ふう俗じやくのの殊こと小こ洒しやう一ひとくく。結むすりり小こ紋もんのの
見みままをを若わか保たもままららししるる古ふる布ふよよのの結むす城じやう本ほん修しゆののまま新あらたにに
ままのの羽はね織おりとといいふふのの傳つと物ぶつとといいふふももああららるるままのの行ゆき丈ぢやうもも合あはあはあれれとといいふふ

まづかまはる。男おとこ一ひと人ひとも。まゝままにに曉あき暎ゆとといいふふややせん。
此こ枝えだがが送おくりりてていい言ことななささるるらら。ととままをを特とくにに来きてて
いいややまま 伴ともハハテテああららるるのの形かたちももああららねねがが。まま女おんな中なかつさんさん才さい
此こ方かたへへおお上あがるるままののまま一ひとトトりりとといいてて小こ棲せりり形かたちももいいままにに
ままのの優やさ女おんな見み世よへへののままのの跡あとももいいままにに一ひと人ひとのの男おとこ
年とし齡なげ四よ十じゅうののままののがが。ままのの風ふう俗じやくのの殊こと小こ洒しやう一ひとくく。結むすりり小こ紋もんのの
見みままをを若わか保たもままららししるる古ふる布ふよよのの結むす城じやう本ほん修しゆののまま新あらたにに
ままのの羽はね織おりとといいふふのの傳つと物ぶつとといいふふももああららるるままのの行ゆき丈ぢやうもも合あはあはあれれとといいふふ



母親ははのいふことも数多のいふことも猶彼とうきひ時刻を
伸びがその内の真の新婦の来るべし然し七見まるべし入らぬ
袖をきり見らるる程ま今宵の角も満て返さす
小如ハなしとを静と胸とますらすていづこゆも後の要をこ
やうあせぬや今宵の肝の主も當りますらく帰りて相相
違ひのりゆでもあて下さすこのいども可ぬ佛頂面三三夫夫
でお茶さんの方ハ宜まうもどごうませうが松方ハ宜まう一下下
まど迷然りうまらるるを縁とハ中也も團圓の中への女と

美さきまたまは夕の新費も多く當家の且那もあ特と
中でもさけは松方の預けも同様で扱を死でまりませぬ
まど角も角もの婦人のまどとあて下さすこのいども可ぬ佛頂面三三夫夫
一人の漢子一アせくゆと幾度言ひてもおんりまりどさくあり
まさうたと汗痕がいと言ひまらても他の女房と俗時まも顔
ろとあらぬわどとまわるるあらへ聞かねてや万石らがあらうまりわ
あらう人の顔を見こしとカハカあら方ハあらうの女が米次あら
別保で女房約束があらうら連てまさこのいども可ぬ佛頂面三三夫夫
女中

かた^カつ^カろ^カ公^カ所^カの^カ位^カと^カり^カゆ^カり^カの^カで^カ公^カ親^カの^カゆ^カり^カて^カ若^カ次^カ布^カと^カそ^カん^カを^カ
幼^カ束^カと^カあ^カら^カう^カ言^カて^カ穿^カせ^カる^カせ^カ入^カト^カ同^カく^カま^カを^カ今^カま^カを^カ何^カの^カ他^カの^カ
任^カし^カ一^カ言^カも^カ出^カさ^カせ^カり^カ当^カ下^カ山^カや^カう^カく^カと^カ頼^カま^カの^カけ^カ女^カの^カ私^カし^カ
身^カの^カ私^カハ^カ雅^カの^カ第^カ一^カの^カ部^カの^カ効^カも^カ名^カの^カ清^カ體^カと^カす^カま^カが^カあ^カつ^カの^カ
且^カ那^カと^カ深^カの^カ幼^カ束^カ足^カ非^カ市^カハ^カ女^カ房^カ中^カの^カゆ^カり^カ其^カの^カ樂^カも^カ
長^カい^カ年^カ度^カに^カ侍^カり^カち^カふ^カか^カつ^カけ^カ頃^カハ^カ一^カ向^カ屋^カも^カま^カさ^カら^カう^カ息^カ
災^カで^カ居^カる^カう^カ一^カ言^カの^カ音^カ信^カも^カあ^カつ^カの^カ同^カく^カあ^カつ^カ思^カく^カ
る^カ板^カ四^カの^カお^カ出^カる^カう^カと^カや^カら^カそ^カも^カせ^カら^カ邪^カ魔^カの^カあ^カつ^カし^カ言^カは^カら^カん^カが

是^カ限^カで^カは^カか^カつ^カら^カず^カ夫^カの^カ身^カ修^カめ^カる^カは^カ僕^カ俤^カも^カあ^カつ^カ
居^カる^カの^カ六^カ吾^カ倚^カり^カ後^カ才^カ連^カら^カう^カて^カあ^カつ^カま^カう^カと^カい^カは^カら^カん^カが^カ
何^カ男^カの^カけ^カん^カ言^カま^カせ^カね^カら^カば^カ一^カ言^カも^カあ^カつ^カ左^カの^カみ^カ訳^カの^カあ^カつ^カ
て^カ來^カる^カ當^カ然^カ々^カあ^カつ^カら^カう^カと^カい^カは^カら^カん^カが^カあ^カつ^カ自^カ己^カが^カ吞^カみ^カん^カだ^カ
今^カ居^カる^カ宅^カハ^カ何^カ知^カら^カず^カ身^カは^カ書^カけ^カて^カあ^カつ^カま^カう^カと^カ現^カ引^カを^カま^カは^カら^カ
且^カハ^カ此^カ方^カの^カ男^カが^カ進^カめ^カる^カは^カ男^カハ^カ五^カ當^カ時^カ私^カ方^カお^カけ^カし^カ一^カ言^カも^カあ^カつ^カ
後^カ草^カ侍^カ乳^カ山^カ賣^カト^カ後^カ世^カの^カ茶^カ海^カ元^カ就^カと^カい^カ尋^カね^カら^カれ^カば^カ
初^カま^カに^カは^カア^カト^カし^カ夫^カの^カ不^カ殘^カ私^カが^カ吞^カみ^カん^カだ^カと^カい^カは^カら^カん^カが^カあ^カつ^カ

言のた元米次弟の仕方うまわ入つて左様な目もたやうわ腹も
さかきかゆい聖明後のうちめいおかゆい沙汰をさるまう支身を
女と顔うてまのていせ入頭は困窮の中とあつて解用の豆
りぬはさしひきこむとさきと二合金か一腹ま一丈多
旦那作のさありサ早く帰らぬおれは下りめと三人法共ぬ
里と早めてさゆり門引ちがて帰るまふ米次弟の叔を見て
小腰を屈ちハハい今帰るまうとトおれは腹の中を腹解て
百八丁と無息まか帰るら。自己ア今やとささかぬの哉と入

思へるんぞ。今日といふ今日帰る切さきその裁ハけは
ついで。塗方もわいその裁と見損らぬ。さうさう
腹切る鼻ど耳順ぬらうらの老丈の腹を切らば嫌なうら
ト思ひかけさぬ叔の言さぬ解せぬらる理の米次弟のこと不
測る顔をしと。米五叔さん。さうやうさう。おれは一腹でさあ
またト言葉を停り母親が留守の結末と粗ぬりさし
ささきあゆむわい物つとさる面持ぬみさつとさつと
らつた。さう。腹が許さうら全体と入頭とあつて今も太助が

振と連てまをこけり赤をこけり。國とまをこけり。田のこけり。まをこけり。親
 身の思情をまをこけり。思ひまをこけり。思ひまをこけり。思ひまをこけり。思ひまをこけり。
 袖の叙の思をこけり。涙の思をこけり。涙の思をこけり。涙の思をこけり。涙の思をこけり。
 何を波風をこけり。納りまをこけり。仕りまをこけり。仕りまをこけり。仕りまをこけり。
 左振其くも仕りまをこけり。仕りまをこけり。仕りまをこけり。仕りまをこけり。仕りまをこけり。
 糸の行舞の思をこけり。太助が思をこけり。太助が思をこけり。太助が思をこけり。太助が思をこけり。
 先へ来るなり

末摘花四編卷之中了



閑情末摘花第四編卷之下

東都

松亭金

第廿三回

再脱太助の衣物の戸をもち披きそ徐くと内より雪の花娘が
 その粧ひ及風俗の花小柳ふとまきまきを被る雪の綿帽を
 後袂とる仇先へさきく末摘花の三月の貸入の打
 拵ある美女の姿とて入る入るまが体身と傍
 納戸へ入る太助の衣物母と万右衛門へ今宵の祝儀手紙



ごうりません。トのへ、他でもまの、米次第の所、房が、這、
のふ不埒千の、吾も、ち、切て、咽、口が、塞、色やせん、ト
清勝が、一、伍、一、件、を、粗、を、七、は、身、を、吻、き、万、一、そ、所、で、は、大、
まん、初、う、中、ま、も、松、不、放、で、面、周、決、争、も、ご、ご、ぬ、が、男、の、も、奇、
らぬ、今、の、所、合、どう、せ、端、で、彼、是、と、同、着、が、あ、る、か、と、い、る、他、の、
大、切、る、女、児、と、若、の、刺、へ、吾、が、養、女、不、七、級、と、組、や、吾、女、公、人、が、
始、ま、う、て、見、ま、い、ば、お、茶、へ、對、一、親、家、さ、へ、
以、茶、う、米、次、第、と、お、里、ど、の、の、情、合、い、と、か、ら、あ、ら、う、い、は、い、

のりけ、と、ま、や、ア、五、の、私、づ、で、吾、あ、の、所、見、ま、い、ぬ、か、
シテ、見、ま、い、今、回、の、一、件、と、あ、ら、う、ま、い、婚、れ、ま、い、の、女、児、の、
痕、を、つ、け、ぬ、の、ふ、す、同、茶、等、理、も、私、も、あ、ら、ぬ、男、の、養、の、
面、水、性、と、や、あ、や、く、と、七、居、る、を、あ、ら、う、が、吾、の、ち、ト、偏、屋、
の、で、木、の、木、竹、ハ、竹、と、あ、あ、や、の、の、後、は、人、同、物、の、落、ち、入、る、
さ、母、ら、ま、い、ぬ、ら、ま、が、小、虎、の、替、札、ハ、お、茶、と、の、か、り、
跡、で、彼、等、が、相、對、づ、で、引、ま、う、込、ま、い、ど、う、ま、い、ど、う、ま、い、
勝、ふ、ぬ、ま、い、が、官、が、私、不、美、ち、不、美、ち、養、母、も、米、次、第、も、

左板おもしろいものよ。ト苦切なる顔をあけぐ。涙めて太
助ハ深き。太一平万ちらまん本もへへのおふりて美知の
不業かぶのと持もね。身もろど女が根込ごう。涙ふ
あがわらうもの。以許終の事だもね。が。夫とや。お茶の
身道はなろう。おとも。迷惑のやア。空も。横のま。ね
のう。コレサ。後ろ。こと。お。つる。せ。人。お。里。ハ。松。が。怪。ご。け。ご。お。茶。の
養女。の。ま。つ。ご。う。の。や。う。え。は。な。は。お。茶。の。お。茶。の。お。茶。の。
次希どのふとも不念ものう。不。念。の。お。茶。の。お。茶。の。お。茶。の。

のりて。疵。の。ふ。ま。う。し。る。の。ご。万。玉。瑕。物。の。る。あ。が。疵。の。
贅。れ。さ。ま。せ。ご。う。人。で。着。彼。尾。が。あ。り。て。見。ま。し。七。返。す。の
る。た。ま。ま。ご。う。疵。物。の。ま。う。ね。く。あ。の。破。法。ふ。し。ま。す。太。一。平。夫。
でも。疵。が。つ。く。と。え。孟。ハ。あ。そ。も。あ。ね。て。も。納。末。奴。受。て。ま。す。
お。新。へ。出。て。も。天。下。晴。て。の。ま。し。お。新。お。ね。う。サ。ア。ま。所。の。ご。う。を
ご。う。の。み。万。一。平。夫。夫。の。お。茶。の。お。茶。の。お。茶。の。お。茶。の。お。茶。の。
ま。う。の。改。め。て。今。晩。又。今。懸。縁。の。あ。ま。ま。せ。う。太。一。平。左。板。の。ま。う。の。ご。
涙。も。ま。う。の。お。里。の。身。分。ハ。お。新。と。七。下。ま。う。の。太。一。平。お。茶。の。



邊にまゝ受て捨るはと一圓おひの恨を晴し
あるはれは黄金の甘とこの悪巧なる圓を
角の中を根を捨てははれぬものごと
世に流しぬと密なまねをかくとこの御汁を
文面不家の主の六秘とを昼夜も地内へ
宅の居る女房の針線の下へ通るお
陣にてお日中一人で居るゆゑの特別を
おとすはとこのお望目申のうらみ計

其後八休とつ明日のうけは世に清く
おののあやう。米次弟の願巾眉深
おともおとせは御人の思ひあはる身
女子の常夫婿の頼み出さるひて。独
とせしその折れは表の方の女のお
てまはるは御物の藤子の透よりさ
まのまゝ。おせはハイおアは御
まゝが今月にお着をござるま
お



お茶が
あつた
よし
よし

先^えの^{きん}。見^みた^り。見^みた^り
 振^ふの^{しん}。振^ふの^{しん}。用^{もち}に^よる^ま。ま^ま
 ま^まの^ろ。声^{こゑ}に^あま^まの^ま。ま^ま。ま^ま。ま^ま。ま^ま
 ま^まと^と通^とし^し。信^{しん}。一^{いつ}。ま^ま。あ^あ上^{かみ}ん^の。ま^ま。ま^ま。ま^ま
 振^ふの^ま。ま^まが^が。あ^あま^ま。ま^ま。ま^ま。ま^ま。ま^ま。ま^ま
 町の^{まち}。朱^{しゆ}。次^じ。常^{じょう}。が^が。妹^い。の^の。ま^ま。ま^ま。ま^ま。ま^ま。ま^ま
 ま^まの^の。沢^{たく}。の^の。水^{みづ}。の^の。あ^あま^ま。ま^ま。ま^ま。ま^ま。ま^ま
 居^い。の^の。所^{ところ}。の^の。目^め。の^の。兄^{あに}。と^と。ま^ま。ま^ま。ま^ま。ま^ま。ま^ま
 ち^ちの^の。地^ち。の^の。水^{みづ}。の^の。あ^あま^ま。ま^ま。ま^ま。ま^ま。ま^ま

込^いの^の。ま^ま。ま^ま。ま^ま。ま^ま。ま^ま。ま^ま。ま^ま。ま^ま
 ま^まの^の。ま^ま。ま^ま。ま^ま。ま^ま。ま^ま。ま^ま。ま^ま。ま^ま
 た^たと^と。隣^{となり}。の^の。女^{むすめ}。の^の。あ^あま^ま。ま^ま。ま^ま。ま^ま。ま^ま
 ま^まの^の。ま^ま。ま^ま。ま^ま。ま^ま。ま^ま。ま^ま。ま^ま。ま^ま
 ま^まの^の。ま^ま。ま^ま。ま^ま。ま^ま。ま^ま。ま^ま。ま^ま。ま^ま
 ま^まの^の。ま^ま。ま^ま。ま^ま。ま^ま。ま^ま。ま^ま。ま^ま。ま^ま
 自^{おのれ}。色^{いろ}。が^が。深^{ふか}。ぬ^ぬ。早^{はや}。意^い。の^の。ま^ま。ま^ま。ま^ま。ま^ま。ま^ま

男が来りて来る。いと他は後にも残念ごと昔性貨の
一徹とやらで兄さんハその時より変な勘當さまです。ツナ
兄さんの言葉は只法師さんと物乗とと並ぶから。沙汰
母は他の女を嫁ひ貰ふハ義理の海をひるけと今回の
みは否責ののりさりの況さう。詮方りあまが左様と法師
さね年明の春さう。き常ある事ば別な宅でも持してあ
様よる張るが様で仕るさう。まじりと言ふののがひさ
会ふのいひの。か一様は様を来るこのいひの陰う大人も

るの仕形ごとまじりさう。あらまのいひは様と北里を
と見まぶ。年明の春さう。いひのいひに不残で実の常
明。いと見せる。まはまが。巻もさう。今回のいひのいひ
私のうさあげ。ま生て。辱るもねさう。昭表既の淵川へ
そはめさう。いと身と強さう。と思ひて見まが。いひは
石時でも死ぬさう。いと體。ま様。いひのいひのいひのいひ
そのまをいひ。一言のいひ遣う。いと先頃ちんを。私の居
所を他。いと聞るを。いひのいひ。いひのいひ。いひのいひ

おまを^き気が^え海^のど^ろま^の自^れ色^がを^の凌^のみ^ま方^ハ宅^ハ入^り浮^つこ^ら
 貴^め母^{さん}の^あけ^のせ^をよく^お働^一中^をと^まと^れま^の眼^まど^を並^べ
 小^ま吏^の証^出し^て三^向往^方が^お是^のら^を一^万一^の怨^まを
 小^ま吏^もも^お方^へ来^らあ^るさ^らの^ら容^子も^見や^う一^つの^お
 前^小邊^を働^しも^仕弁^いゆ^くま^らう^の小^兄さん^が死^んで
 見^初め^お茶^い左^振り^七見^目ぶ^ぬの^乃ぬ^のお^茶六^の款^も
 原^野の^怨も^いま^変け^しま^の生^死も^まの^らま^れも^早
 ま^らて^お笑^ひ草^トま^く変^じよ^ふ法^勝の^頭の^胸を^ある

ち^の心^の顔^を赤^くる^りま^の案^どの^青く^もあ^らい^ど
 も^表へ^るま^らう^の産^生上^のと^視つ^て愛^情
 の^折る^まの^母の^身の^人
 赤^い海^ねの^案ど^ら米^{さん}の^身の^人サ^ア些^も
 とも^早く^泥町^土下^の他^のの^公の^しを^ひき^も早^ねて
 見^まる^らう^又ト^疎子^を明^て当^花へ^江足^踏込^び信^と助
 を^共後^成る^方向^で一^アイ^ヨ然^おま^ちる^らい^と見^まる^ら
 ら^居る^のゆ^を直^ゆと^男の^が除^りの^法勝^{さん}と^ツイ

悔しうら二言二言ア多減があらはしつゝのや圓いとも
 法精が身の変りなる悪くさ切き。法を助へ多きて
 世とつれそやんとするて法精くまうらま。又其の法は極み
 言のつらも似山の。さうとゆふてこも種なる。高は法精の物
 り長けとつる。流む巻と極て分解さへ
 新者言は法精が所なる。方なるが書中の汁兼膏官
 ちろく。極量も五編の。て洋か。大因因なるのあり
 末摘花四編卷之下了

神皇御藥
 神僊神明湯
 一廻り分代銀六匁
 一包代百銅

善阻よへ山下つるえ食まきまきんふ何とま。ぶらんとり分
 赤い。いんさんごの。法。病。用。ひ。く。神。ご。り。い
 赤い。いんさんごの。法。病。用。ひ。く。神。ご。り。い
 赤い。いんさんごの。法。病。用。ひ。く。神。ご。り。い

赤い。いんさんごの。法。病。用。ひ。く。神。ご。り。い

けりてふやむる病を血のいづかやうの病といはれしはあ
 濁人二三月月にもあざとなり疵癩うつりがたは麻痺に多
 くのあざありて漸く此のまのこまひき息を引取らるるに
 是の二三月のうちに月も下居べしと推察するものと
 づかふもかゝる病にうつらふやうにせらるる病と
 りんがたはあざとなり疵癩うつりがたは麻痺に多
 こかへてのむせはれむせむせの病といはれしはあ
 男女ともむせはれむせむせの病といはれしはあ
 下痢後毒むせむせむせの病といはれしはあ
 小児にうつらふやうにせらるる病にうつらふやうに
 社功皇后の懐胎すこ二韓行にうつらふやうに
 細心しつゝの病を治すむせむせむせの病といはれしはあ
 病のいづかやうの病にうつらふやうにせらるる病

海内無類 五功丸

一週り銀三匁 一包四十八銅

とうめんの大効あるもの一は海内無類の病にうつらふやうに
 人の病のいづかやうの病にうつらふやうにせらるる病
 ありてはつゝ大効あるもの一は海内無類の病にうつらふやうに

藥法 根元 藥王丸

一色 一包十八銅

男女とも年次一は樹木を由りては樹木を用ひてすまふ
 けりてふやむる病を血のいづかやうの病といはれしはあ

神仙廣徳丸

一包 百銅
半包 四十八銅

才小児万病の薬なり五かんきを風入すに効く小児のうらり
んかんのきこりあつたをいせりすまふ海を成るん
ていんえんをいせりすまふ海を成るん
あつたのいせりすまふ海を成るん
あつたのいせりすまふ海を成るん

三國一風薬

才一風薬のいせりすまふ海を成るん
あつたのいせりすまふ海を成るん

神話合所 大坂老舗 江戸内 尾重太郎製

取 未だ二条通 大坂老舗 尾重太郎 神話合所
次 江戸老舗 丁子屋手書 尾重太郎 山崎屋手書 尾重太郎



